

日本のまんなかでアートをさげんでみる

【後期】2024年6月14日[金]ー9月8日[日]

■ 出品作品  撮影 NG マークの作品をのぞき、写真撮影が可能です。

* 印の作品は裏面に解説があります。

1
イサム ノグチ
「レディミラー」
亜鉛メッキ、鋼
1983 年
149.2 x 43.2 x 43.2 cm

2
磯崎 新
「Museum Form II
1. House Form」
鉛レリーフ
1987 年
60x60 cm

3
佐藤 時啓
「こんな夢をみた
ー親指と人さし指は、網目の
すき間の旅をするー」
ビデオ
2020 年
12 分 (ループ)

4-8* 
ロバートメイプルソープ
「レディリサライオン #5」
48.5 x 38.5 cm
「レディリサライオン #1」
「レディリサライオン #4」
「レディリサライオン #3」
「レディリサライオン #2」
各 38.5 x 38.5 cm
写真
1980-1982 年

9*
加藤 泉
「無題」
ミクストメディア
2007 年
95 x 65 x 45.5 cm

10 
マルタパン
「彫刻 93」
合板
1965 年
20.6 x 42.5 x 20.5 cm

11*
円山応挙 《まるやまおうきよ》
「山水図屏風」(春夏)
《さんすいずびょうぶ》
六曲一双 | 紙本著色
江戸時代 (18 世紀)

12*
住吉広行 《すみよしひろゆき》
「布引滝図」
《ぬのびきたきず》
一幅 | 絹本著色
江戸時代
(18 世紀後期～19 世紀初期)

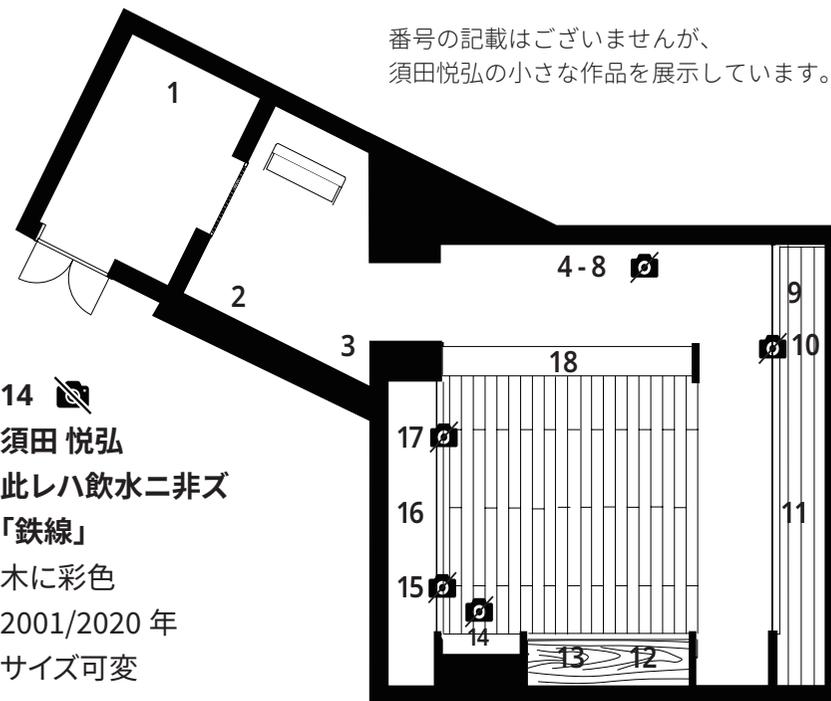
13*
伝 岩佐又兵衛 《いわさまたべえ》
「伊勢物語図」
《いせものがたりず》
一幅 | 紙本著色
江戸時代 (17 世紀)

14 
須田 悦弘
此レハ飲水ニ非ズ
「鉄線」
木に彩色
2001/2020 年
サイズ可変

15 
エドワード キーンホルツ
「ビリオネアー デラックス」
缶、合成樹脂、フレネルレンズ、
電球、秒カウンター
1977 年
27.9 x 38.4 x 35.6 cm

16*
伝 芝琳賢 《しばりんけん》
「聖徳太子絵伝」
《しょうとくたいしえでん》
二幅 | 絹本著色
室町時代 (16 世紀)

番号の記載はございませんが、
須田悦弘の小さな作品を展示しています。



17* 
劉 建華 (リュウ ジェンホァ)
「Colour Ceramic
Series-Play」
陶
2001 年
58 x 58 x 22 cm

18
ジェイソン テラオカ
「隣人」
紙にアクリル、インク、接着剤
2006 年
各 20 x 16 cm
(88 点組のうち 33 点)

■ 作品解説

4-8. ロバート メイプルソープ (1946-1989)

1970年代初頭から写真を手がけ、1977年にはカッセルのドクメンタに出品。モチーフは花、静物、メール・ヌード、有名人ポートレート、セルフポートレートなど様々だが、精緻で透明感と緊張感に満ちた作品を制作。時にゲイを主題とした作品はスキャンダラスに取り上げられた。本作は、1983年に出版された写真集『レディ リサライオン』のシリーズである。

モデルであるリサライオンは、1979年の第1回世界ボディビルディング選手権大会で優勝し一躍有名になった人物。この写真集はリサライオンとメイプルソープの2年間にわたるフォトセッションによって完成したものである。彼女の肉体はそれまでの男性のためのポルノとしての女性ヌードと全く異なるものであり、筋肉愛好家が好むボディビル写真とも異なっていて、1970年代後半にメイプルソープが力を注いだSM写真とおなじように肉体の存在を強調するものであった。1988年にホイットニー美術館で初の回顧展が開かれたが、その翌年にエイズにより死去。

9. 加藤泉 (1969-)

加藤泉が手掛けるモチーフは、初期から現在に至るまで一貫して、どこか不気味で不安定なヒトガタである。彼は「絵画とは何か」という問いを出発点に、筆だけでなく自身の指も使い、カンヴァスや粗く削った木、大型の布、ソフトビニール、天然の石など、様々な支持体に描き、時にそれらを組み合わせる。絵画(平面)の二次元性と彫刻(立体)の三次元性の両方を持ち合わせる個々の作品は、また、動きと静けさ、重さと軽さ、安定と不安定、素朴と洗練、普遍性と特殊性といった両極を内包し、独特の存在感を放つ。

11. 円山応挙「山水図屏風」(春夏) 江戸時代(十八世紀)

江戸時代後期に活躍した絵師で円山派の祖である円山応挙による春夏秋冬の景色が描かれた六曲二双の内、春と夏の絵。

応挙の晩年の作品と考えられ、近景は繊細に、遠景は大胆に描かれた、空間を感じるための絵である。背景の細かい砂子や金泥は応挙によるものと考えられるが、金砂子は後補のものと思われる。

12. 住吉広行「布引滝図」江戸時代(十八世紀後期~十九世紀初期)

『伊勢物語』第87段より、布引の滝(現・兵庫県神戸市中央区)の前で、男が兄や友人たちと歌を詠じる場面。

布引の滝は、古くから和歌に詠まれた地で、都の人が思いを馳せる名所であった。人物をはじめ諸景物にいたるまで、細密でありながら軽淡な筆づかいで描かれており、流れ落ちる滝の音や、人々の話し声が聞こえてくるかのようだ。

13. 伝 岩佐又兵衛「伊勢物語図」江戸時代(十七世紀)

『伊勢物語』の第39段「源至(みなもとのいたる)」の一節とその描写。

◇参考現代語訳

源至はこの車に女が乗っていると見て近寄り、あれやこれやと色めいた素振りをして、螢を捕まえて女の車に投げ入れた。螢の灯火で車中の姿が外から見えてしまうだろうから灯を消そうということで、(女の車に)同乗していた男が(女に代わって)歌を詠んだ。

「(皇女の葬列が)出て行ってしまったらそれが永遠の別れとなると思い、何年も経ったかと思うほど長い時間待って泣いている(私の)悲しみの声を、灯を消して聞きなさい。」

至の返しの歌、「私も心を打たれ、あなたの泣く声も聞こえます。しかし(私の心の)灯火(=あなたへの思い)は消そうとして消えるものではありません。」

16. 伝 芝琳賢「聖徳太子絵伝」室町時代(十六世紀)

『聖徳太子伝暦』を主な典拠として聖徳太子の伝記を描く「聖徳太子絵伝」の一例である。

描写は全体に瀟洒で、人物の顔貌には気品が漂う。自然の景観の中に聖徳太子の誕生(右上)から始まる物語の場面が配置されている。

17. 劉建華(リュウ ジェンホァ・1962-)

古くから陶磁器の生産地として有名な中国江西省景德鎮で育ち、磁器工房において職人として働いた後に大学で彫刻を学んだ。磁器本来の用途からは離れながらも表現には磁器を用い続け、そこに中国社会における大きな変化と問題を反映させた作品を制作している。